

コミュニケーションにおける視線の役割と効果的使用法

明田 颯真

颯真さんは、当初「旅」を関心事として挙げていた。私のゼミでは、問題関心の明確化のために、話題に関連したエピソードをできるだけ具体的に書いてもらう。颯真さんは旅先で出会った人と語ったこと、しかもかなり深いライフストーリーに踏み込んだ話を書いた。颯真さんにとっての旅の喜びは、未知なる人々との語り合いから来ていた。そこから、人間関係を作るための会話方法へと興味に移り、最終的には非言語コミュニケーションとしての視線の機能に落ち着いた。巧みな話し手・聞き手になりたいということだったので、私にとっては、自分では意識的になりにくい動作に着目したことが意外だった。

卒業論文では 3 つの研究論文を選び、その論文が実験で証明した視線の機能に基づき、日常生活での活かし方をまとめた。論文の証明したこと自体は、ポジティブな感情表出の時には相手に対する視線量が多くなる、相手に対する好意的または非好意的な印象は相手からのアイコンタクトの多さにより強調される、喜怒哀楽などの感情を単純な図形の動きから推定できる、といった、一般的な実感にそぐう結果だった。颯真さん自身も衝撃的な発見はなかったと書いている通りである。颯真さんは、けれどもそうした事実を知り意識的に行うようになったことで、アルバイト先でも活用できていると述べている。

このあたりどのように考えるのかとても難しい。ロボットにことばを話させようとか、コンピュータに翻訳させようとする場合、昔は、ことば自体のルールを体系化し、そのルールをロボットやコンピュータに覚えさせようとした。しかし実際の言語使用は、多様で可変的な環境とも関係している。文字列の法則性に加え、文字列と環境の関係すべてを法則として明示するのは不可能だ。そこで、ことばそのもの、環境そのものに、コンピュータをひたらせて、勝手に学んでもらうほうがよほど効率よく「正確」でもあるという AI の考え方が出てきた。視線の使い方も、ひとりの人間が生きていく中で身に付けていくものなので、複数の人間に共通する法則として見出されたものを、再度一人の人間が知識として学びなおすことの意味は何だろうか。颯真さんが 3 年時に書いた旅のエピソードからは、颯真さんが、他者が語る内容に強く惹かれ、惹かれるがゆえに尋ねさらに語りを引き出してきたことがうかがえる。こうした語り合いは、ストラテジーの意識的な使用により、さらに効果的(?)になるのか。仕事上での視線の有効利用を考えている颯真さんに、いつか結果を尋ねてみたい。

取り組み始めるための動機づくり

朝倉 麻央

麻央さんが、最初に取り上げた興味関心はアイドルだった。ただ、自分が趣味として楽しんでいるものを対象化して論じることが難しかったようだ。研究のテーマには必ず何らかの問い（問題意識）が必要である。3年生の間、麻央さんとテーマについて考えていく中で、身の回りの大学生はなぜアイドルに夢中になるのか、生活全体の中でアイドルはどのような存在なのかを私から尋ねた。「現代の大学生の生活全体にこのような問題があり、だからアイドルにはこのような意義がある。それをほかの人に伝えるにはどうすればよいのか」といった問いにつながるように考えていたからである。しかし、大学生活の中でのアイドルの意味という私からの質問に、麻央さんが自分を当てはめた結果、ある試験合格のために必要な勉強の、むしろ妨げになっていると考えるようになり、自分にとって直接的な課題として、学習方法や学習の動機づけへと関心が移っていった。

そして、卒論では、心理学の動機付け研究の最新理論をまとめた論文集1冊（上淵・大芦、2019）と、「思考のくせ」と「ハマリ」の技法を紹介した一般書2冊を、自分の興味に沿うようにまとめなおした。動機づけの理論で麻央さんが特に注目したのは「興味の発達」であり、「状況的興味」から「個人的興味」への発達プロセスだった。周囲の状況により対象への興味が喚起され、状況により対象への知識を得たり価値を認めたりする、それがさらに進むことで、対象に自らの問いをもつようになり、知識・価値が蓄積され、対象に永続的・自発的に取り組めるようになるということだ。

麻央さんには「状況的興味」から「個人的興味」へと発達するためにはどうすればよいのかを見つけてほしいとリクエストしたが、取り上げた文献に直接の答えは見つからなかったということだった。それでも、上淵・大芦（2019）の4章や5章は、「状況」を具体的にとらえるためにヒントを与えてくれそうだ。また、最後の8章では、意志研究として、人が行動する際の価値（特に倫理面での価値）判断に着目することなどが提案されている。今この瞬間、勉強するのか否かは、自分が興味をもつとか、やる気を出すとか、「思考のくせ」を何とかすることで解決できるのか。私としては、社会的・時代的な文脈の中に置かれた自己でありながらも、その勉強によって得られるものの価値（損得ではなく倫理的なもの）を、意志を持って考えることで行動に移してほしいと願っている。

将来のキャリア（生き方）の多様性を中学生に示すために

上村 みく

上村さんが最終的にこのテーマに決めたのは4年生の夏休みで、それまで紆余曲折があった。食べること・料理が好きだというアイデアから、好きなのは他者ともに食べそのために料理することだとわかった。そこからの関連で、自分が人と関わるのが好きなので、将来接客業に就きたいと考えており、接客で工夫すべきことをテーマにしようというアイデアを思いついた。そこで接客のアルバイトをしている友人と対話するのだが、友人のアルバイトへのモチベーションは実利的で、上村さんの接客・人とかかわりあうことへの興味とはかなり違うものだった。また上村さん自身がアルバイトをしていた接客業と、就職を希望する職業の接客業との間にも違いがあることに気が付き、自身のキャリア計画にも、3年生終わりの中間論文のまとめ方にも強い迷いが出てきた。そして改めて、自分が楽しんで書けるテーマをと考え、自分のコンプレックスの源でもあった姉と対話し、「自分らしさを考える」というテーマでまとめた。

その後、上村さんにとって自分らしく生きるとは女性らしく生を楽しむということだといった結論付けた。私からは、「女性らしさ」言説の分析を提案し、雑誌や、『女性の品格』（坂東真理子）などのベストセラーから探ることを提案した。ところが『女性の品格』を読んでみたところ、上村さんにとっては自分が不足している部分を指摘され続けているようで、読んで苦痛を感じたということだった。そこをクリティカルにまとめられると言説分析研究になると私は考えていたが、4年生の夏休みの間に、「女性らしく生きる」ということ自体に興味を失ってしまったということで、上村さんから、改めて自分がもっていた子ども時代のコンプレックスを振り返り、それを乗り越えるという方向性で文献を読んでみたいと提案があった。紆余曲折を経て書かれた上村さんの卒論は、問題意識、文体、ストーリーともにクリアで、中学生と親にとって有用な、「キャリア・生き方本」のレビュー集として仕上がった。

上村さんのテーマ探しの過程を追っていくと、ゼミや対話を通じた言語化の繰り返しと、就活といった生活経験の積み重ねによって、まったくばらばらに見えていた問題関心がつながっていき、最終的に自分で納得して取り組むことのできるテーマにたどりついたことがわかる。卒論自体も理解しやすく優れたものだが、私にとっては、上村さんが自分の違和感に逆らわず、粘り強くテーマ探しを続けたことが特にうれしい。

高校野球の魅力から見る球数制限—野球人口減少を食い止めるため—

梅崎 亮

梅崎さんは、初対面の人との会話が苦手という問題をテーマの候補に挙げていた。しかしよくよく聞くと、今までそれを改善しようとしたことはなく、今のところそれほど大きく困っているわけでもないということだった。なぜ困っていないのかを考えていくと、週末は、高校時代の元野球部員で草野球チームの活動をしており、大学であまり人と深くつきあわなくても問題のない、自分にとっての居場所がすでにあるということだった。私からは、大学生にとって、大学以外に居場所があるということ自体が稀であると思い、それに関連したテーマを提案した。しかし梅崎さん自身はそこに問いを見出しがたく、自分が好きな野球、中でも高校野球での球数制限というテーマに決めていった。

卒論では、高校野球の歴史、その隆盛へのマスメディアや宗教のかかわりといったことをまとめたのち、高校時代の友人との対話結果、元野球選手らによる球数制限への賛否両意見について考察した上で、公立高校に不利でなく、かつ投手への負担軽減のために、試合数の低下や金属バットの反発力規制といった提案を行った。

印象的なのは、新聞社の広報や高校への学生集めのために高校野球が利用されてきた面を認識しながらも、なお梅崎さんが、高校野球部員にとってすべての力を出し切るだけの価値あるものとして、甲子園での全国大会をみなしつづけているということである。小学生から野球を始め、高校までは部活動で、大学からは草野球でと、梅崎さんは活動の場を変えつつ、野球をつづけてきた。その経験が、球数制限は複数の投手を擁する私立高校に有利になる、そうならないために具体的な提案を行う原動力になったのだろう。そうした経験のない私は、もともとは少年期のスポーツ活動でそこまで勝敗にこだわらなくてもよいのでは、梅崎さんが紹介していた桑田真澄のように選手の体を守ることを第一でそのためには球数制限導入もやむをえないのではと考えていた。しかし別の方法でも可能という梅崎さんの提案内容に納得させられた。

それでもなお考えてみてほしいのは、厳格な球数制限を導入している他国での、青少年のスポーツ活動に対する価値づけである。梅崎さんも最後に触れている海外のクラブチーム制度と、部活動とは、目標もシステムもかなり異なる。その背景にはどのような思想があるのか。陽奈さんの取り上げた子どものスポーツ活動や、日本の教育制度にもつながっていくトピックとして、高校野球を改めてとらえなおしてみるのも面白いと思う。

非日常性がもたらす幸福感～映画館と観客の歴史とその未来～

太田 有里乃

たろさんは以前別の大学に通っていたことがあり、すでに卒業論文を一度書いた経験があった。その際はテーマを決め、文献を集めまとめていくという流れで執筆したということだった。ところが私のゼミでは、自分の関心はどのようなもので、なぜ関心を抱いているのかについて考えることにほぼ1年を費やす。たろさんははじめ、自分が好きなこと（アイドル、テーマパーク、映画）の理由を考え書くことがテーマ設定につながるのか、少し戸惑っていたようだった。そこで、好きなことそれぞれについて、いつどこでどのような経験をしたことが特に印象に残っているのか、エピソードを書いてもらった。たろさんはもともとそれらに非日常性という共通の魅力を感じていたが、一口に非日常性といっても具体的な中身はさまざまである。エピソードを詳しく書くことで、たろさんにとっての非日常性の意味とは、見知らぬ他者と空間・感情を共有することだとわかってきた。その後、たろさんは、友人との対話を通じて自分にとっての非日常性とは何かをより明確にし、中でも特に好きな映画館の存続を卒論のテーマにすることに決めた。

卒論でも書かれているように、現在は、インターネット動画配信サービスが各種あり、映画も映画館で見るよりも個人・家族単位で、自由に見ることのほうが主流になっているかもしれない。私自身もそう予想しており、さらに2020年の新型コロナウイルス感染症の流行が拍車をかけるものと思っていた。しかし、卒論を執筆する中で、改めて全国のスクリーン数や動員観客数の増減データを具に見た結果、実は近年両方とも上昇傾向にあることがわかった。またたろさんは、その背景に、シネマ・コンプレックス（シネコン）の新設と上映方法の発達、アニメーションやシリーズものを中心とするヒット作品の出現、コアな映画ファンが支えるミニシアターの存在があることも指摘した。さらに卒論では、ネットでの動画配信サービスがむしろこの作品を映画館でみようとするきっかけにもなりうる、ミニシアターがシネコン的な上映形態で集客している、コロナ禍での廃業を防ぐためのクラウドファンディングが成功していることなど、あまり知られていない映画館の今が、最新の情報から描き出されている。この卒論を読めば、映画館もまだまだ捨てたものではなく、非日常を味わうために足を運ぶ価値のあるものだと思えるようになるはずだ。これもコロナの影響で映画館でのフィールド調査はできなかったが、たろさんには、一步一步理解しながら着実に進めていく力を今後も発揮し続けていてほしいと思う。

「女生徒」と「有明淑の日記」の比較

楫屋 雄大

楫屋さんは、日本文学（小説）に関心があるという点で終始一貫していた。本学部には文学を専門とする専任教員はおらず、文学系の授業も教職に関する英語文学のものしかない。楫屋さんも悩んだ結果、日本文学の研究バックグラウンドがほんの少しはあり、「日本語文化論」の授業で日本語文学に触れた私のゼミを志望したのだと思う。

3年生の初めには『源氏物語』を研究したいということだったが、私のゼミではいきなり研究対象について調べることはせず、まずは自分の問題意識・問いを明確にすることを求めている。楫屋さんについても、そのため『源氏物語』のどこがどのように興味を引くのか、日本文学・小説が好きということであればそれは誰の何をどのようになのかと、動機の部分を私もまた他のゼミ生も問うていった。最初からこれを調べたいという強い思いをもつ学生にとって、この動機・問題意識の確認作業はまるでっこしく感じられることもあり、時に反発することもある。楫屋さんの場合、文学・小説の意味を自分に問うことをいとわず、何度もことばにしていった。音楽ということばを使わない芸術を職業とする、元バイト先の先輩と対話をし、文学と音楽との共通点・相違点について考え、卒論では、小説などの文章をよりよくするための方法を、太宰治の『女生徒』から導き出すと決めた。

その後、文学研究の全般的な知識を得るために、文学理論や現代思想の入門書を読み漁った。その集中力には驚かされたが、小説作品を分析対象とするならば、まずは何はともあれテキストそのものに向き合う必要がある。楫屋さんが改めて調べてみたところ、『女生徒』とそれが下敷きにした有明淑の日記との比較研究はすでに行われていたが、異同関係を網羅するものは見当たらず、また先行研究の結果も楫屋さんにとって腑に落ちない点があった。そこで最終的な卒論では、有明淑の日記をデジタルデータ化し、『女生徒』と日記を比較した結果を、資料して公開することをめざすことにした。楫屋さん独自の分析はこれからだが、卒論から両者を読み比べてみると、太宰が日記からそのまま引き写している部分はかなりあること、トピックごとに日記を切り貼りした上で、細かな表現を加筆修正していることがわかる。こうした細かな加筆・修正部分を分析することで、太宰らしい表現の特徴が浮かび上がると期待できる。思い立てば実行に移せるという楫屋さんの意志の強さと行動力、そしてコンピュータ利用についての知見も活かして、新しい形での太宰研究や文学研究、または自身の作品作りに臨んでほしい。

熊本地震の復興への道筋—ONE PIECE 熊本復興プロジェクトを事例に—

川口 いおり

いおりさんの卒論の最終的なテーマは、漫画 ONE PIECE による熊本地震復興プロジェクトについてである。いおりさんがこのテーマに決め卒論執筆を始めたのは、おそらく11月終盤になってからのことだと推測する。

いおりさんはご実家が花づくり農家で、中国から技能実習生を受け入れてきた。いおりさんは、ときおり夕食をとともにするなど、子どものころから実習生と触れ合う機会があった。大人になっても中国に近い感覚をもっているということで、私自身の専門からみても興味深い事例だった。国や研究論文でも技能実習生受け入れのモデルケースの紹介はあるが、受け入れが子どもに与える好影響について論じたものは見当たらない。技能実習制度には数多の問題があるが、幼少時からごく身近に外国人と暮らすことの影響は何かという問いに広げると、新たな研究につながる予感があった。いおりさんも進級論文では、ご家族に受け入れのメリットや難しさなどを尋ね、その後も文献を集めるなどしていた。

ただ、私は面白いテーマだと思っていたが、いおりさんは中国人との関係をつづけていたわけでもなく、このテーマに強い意義を見出せなかったようだ。4年生の夏休み後、いおりさんは別のテーマを提案し、最終的には漫画が非常に好きだという自分の真の興味を活かした、熊本地震復興プロジェクトについて書くことに決めた。

いったん決定したのちは、友人へのインタビュー、プロジェクトを主導した県庁職員へのインタビューと驚くべき手際よさでデータを収集し、熊本県の復興指針全体の要約、インタビューの詳細の掲載、プロジェクトのこれまでとこれからの有効性を、スムーズな流れで仕上げることができた。熊本地震復興に関する先行研究の調査や、他地域での震災復興事業との比較があれば、さらに説得的に主張を述べられたのではないかと思う。これは、私が技能実習生受け入れのテーマを強く勧めてしまっていたことに一因がある。自分にとってどうしても解決したい、どうしても他者に伝えたい問いでなければ、その人のテーマにはならない。逆にそうした問いが見つければ、調査も執筆も進められる。このことはゼミ生に繰り返し伝えることなのだが、今回、私の興味がいおりさんの興味の発露を妨げたのかもしれないと反省している。聞き出すことに徹していた私の元指導教授、細川英雄の言語教育思想と実践の偉大さを思い出すとともに、最後に強い意志で自分で新しいテーマに決め、卒論に仕上げたいおりさんの底力を称賛したい。

児童・生徒のスポーツ活動の重要性

塩見 陽奈

陽奈さんは3年生の開始当初こそ、方言と人柄の関係といった言語に関係するトピックに関心を示していた。しかし私が、そうした関心事に陽奈さんは強い喜怒哀楽を抱いているのかと尋ねると、そうした思い入れはないということだった。私自身の専門からすれば、言語政策や言語教育に関連するテーマのほうが十分な支援ができるのだが、学生自身が真に思い入れのあるトピックを出発点にしないと、どうしても問いが一般的なものになり、長丁場の卒論執筆が難しくなる。陽奈さんは、強い思い入れのあるトピックをすぐには見つけ出せず、ゼミの後、何度か私に助言を求めてきたことを覚えている。

その後、今まで一番熱心に取り組んだ剣道の部活動について、魅力とデメリットを詳しく書き、こうした部活動の意義をほかの人にも伝えたいという目標で取り組むことになった。その後は非常にスムーズで、まず同じ高校出身で、関学で剣道部に所属していた先輩と対話を行った。それをまとめ進級論文を書いた結果、陽奈さん自身も先輩も、剣道というスポーツ自体の魅力というよりも、人とのつながりが得られたことや、自分の特技や性格を理解できたことなどを魅力として感じていることがわかった。そして3年生の春休みから、部活に関する文献を読み、部活というよりスポーツ活動と範囲を広げ意義を主張したいということで、子どものスポーツ活動に関する文献も読んだ。そして、3年時の対話の結果も存分に生かしつつ、スポーツ活動の意義とそれを阻害する問題点、今後の特に指導者のあり方という、ストーリーと主張ともに明確な卒論に仕上げた。

陽奈さんがスポーツ活動の意義としてまとめたのは、主に、社会、言い換えれば企業に期待される力（積極性、柔軟性、外向性）の取得であり、これらの力の取得を阻害するものとして、いじめや体罰などの問題が論じられていた。社会生活を適切に営むための準備としてのスポーツ活動という位置づけである。しかし、たとえば陽奈さん自身が先輩の対話からは見出した、人とのつながりを得るといった点は、未来のためでなくスポーツをしているその時点でも意義があるだろう。また未来のためというとき、心身の健康の基礎作りといったことも考えられる。このように意義を広げるなら、今のスポーツ活動の問題点や今後の提案の内容も変わってくる。まもなく陽奈さんの活動の中心は、大学から職場へと大きく変わる。けれども、そこが本当に中心なのか、中心でなければならないのかという、相対化する視点も時折もってほしい。

K-POP が今後も日本で人気を維持していくには～SNS を使った戦略～

高田 理代

理代さんは、当初、子育て・教育を取り上げようとしていたが、春学期の終わりには自分が趣味として楽しんでいる K-POP について書いてみることに変えた。趣味を研究テーマにしようとする、自分が楽しんでいるだけのものは研究テーマになるのかと疑問をもつ学生も多い。しかしその趣味が自分にとってかけがえのない存在であるならば、「これほど自分にとって価値をもっているものごとを他の人に伝えたい、どうすればその魅力が伝えられるのか」といった問いから、さらに具体的な問題意識を見つけることができる。理代さんの場合も、どのようにかけがえのない存在なのかを文章化したのち、K-POP ファンの友人との対話、就職活動、先行研究の調査を経て、最終的には「K-POP が今後も日本で人気を維持していくにはどうすればよいのか」という問いに絞っていった。

K-POP について私自身はまったく知識がなかったが、たとえば、『ユリイカ』が 2018 年に「K-POP スタディーズ」を特集するなど、2010 年代末からその流行の歴史・要因を探る論考が発表されている。そこで理代さんは、それらの論考から、これまでの K-POP 流行の経緯をまとめたのち、「ファンダム」「ガールクラッシュ」「SNS」をキーワードに K-POP 流行の現状・要因、今後への提案をまとめた。

理代さんの金（2018）の要約によると、東方神起は 2007 年に日本で本格的に活動を始めその後人気を獲得、また少女時代、KARA は 2010 年に日本デビューしヒットしたという。日本で『マンガ嫌韓流』が発売されベストセラーになったのは 2005 年、「在日特権を許さない市民の会」（在特会）が設立されたのは 2007 年である。在特会はその後、2009 年から会員数を急激に伸ばした（樋口直人、2014、『日本型排外主義』名古屋大学出版会、p.12）。韓国や在日コリアンへの排外意識が高まっていった同時期に、K-POP は人気を獲得していったことになる。理代さんによればその後も K-POP 人気は続いており、背景に女性が女性グループを熱烈に支持するガールクラッシュ現象と、その現象を可能にする SNS の存在があるという。社会心理学では、レイシズムは女性のほうが弱いという指摘がある（高史明、2015、『レイシズムを解剖する』、勁草書房、pp.99-100）。反韓国意識の高まりに関係なく、K-POP や韓流ドラマの人気が続くことの一要因なのだろうか。また SNS は、K-POP のファン獲得とともに反韓国人意識の広がりにも大きな役割を果たしている（樋口、2014、高、2015）。理代さんに関係を考えていてもらいたい。

「臨界期」後の言語習得の可能性

玉井 亮伍

玉井さんは、私のゼミでは珍しく、3年生から卒論完成まで、研究テーマの大筋は変えなかった。地域の学習支援活動のボランティアにかかわっていた玉井さんは、幼児期の英語教育が日本人としてのアイデンティティの喪失や論理的思考能力の発達のみならず、なってしまうのではないかという問題意識をもっていた。他方で、英語の教職免許取得も考えており、英語教育が重要だとも考えていた。その結果、幼児から英語を学ぶ必要はないのではないか、言語の習得年齢には限界があるとする臨界期説は本当に正しいのかと、自分にとって重要な問いを見つけていった。

玉井さんは3年生の終了後、英語学習を目的に海外留学し、実体験から臨界期説は誤りだということに確信を深めてゼミに戻ってきた。卒論の冒頭でまとめられているように、臨界期説の適合性は、第1言語、第2・第3言語の違い、音声、意味、統語、語彙といった言語能力の多様な側面などにより違いがある。また、それぞれの実証の精度についての問題もある。玉井さんは4名に対するインタビューデータから、先行研究の指摘を改めて確認するとともに、臨界期説で否定されている青年期以降の英語でのコミュニケーション能力の習得、それを可能にする要因について明らかにしようとした。そして最後に、臨界期説にかかわらず、英語習得に重要な要因として動機づけを上げ、外発的動機づけと内発的動機づけの違いと関係についてまとめた。

英語を幼児期から教育する必然性はなく、いわゆる臨界期をすぎても動機づけがあれば、英語でのコミュニケーション能力は習得可能、そのことを他者に知らせたいという当初の問題意識は、卒論執筆終了まで一貫していた。英語嫌いの人も、玉井さんの卒論を読めば、動機さえあれば英語でやりとりできるようになると思えるだろう。一方で、自分には動機がないという思いを強くする読者もいそう。玉井さんは本人が不必要なら学ばなくてよいと書いているが、そのことと、小学校英語に内発的動機づけを生み出すという可能性を見ていること（5章）、冒頭でビジネスでの英語使用が自らの英語学習の動機づけになったと述べていること（1章）との関係は、どのように考えるだろうか。英語はビジネスに必須という言説自体を否定する論考もある（寺沢拓敬，2015，『「日本人と英語」の社会学』研究社）。たぶん3年生の時、繰り返し問いかけたと思うが、なぜ英語でなければならないのかについてという問題についても改めて考えてみてほしい。

リーダーのあるべき姿とは～専門的知識との関係性～

津田 健太郎

健太郎さんは3年生終わりの進級論文までは、人が依存症になる原因は何かに興味を持っていた。金銭にかかわる勝負事に熱中しすぎていたという経験を持ち、切実な問題解決につながる問いのように思われた。しかし、現在はそうした勝負事から遠ざかっており、周囲の知人・友人で何か依存している人には一定の傾向があるようだ、それは何かという、自分自身から離れた問いになっていた。健太郎さんは、ほかの人も興味をもちそうなテーマにするということを強く願っており、自分の問題意識があいまいだった。読者（世間・社会）も興味をもちそうな問いから始めようとする、時事・社会問題を扱うことになりやすい。そうした問題も無数にあるので、個人の問題意識を選択に活かすことはできる。また問題意識が鮮明であれば、時事・社会問題からより明確な独自の問いを導き出すこともできる。しかし肝心の問題意識が弱いと、問いも一般的なものになりがちだ。健太郎さんの読者へのサービス精神が、自分のための問いの提起をしばらく邪魔していた。

私からは、十分に考え検討して自分のための問いを立てれば、結果的に同じような問いをもつ他者にも興味深い研究になるということは何度か話し、健太郎さんは、4年生の就活を経てリーダーシップの在り方に関心を変えた。当初は啓蒙書を読もうとしていたが、リーダーシップについてこれまで悩んだ自分のエピソードを書いてもらおうと、統率しなければならないチーム（野球部）において、チームメートのほうがリーダーである自分より知識や技術があったため、うまく引っ張っていけなかったという過去の話が出てきた。そこで専門的知識が不十分な場合のリーダーシップの在り方を問いとして設定し、H・コリンズ、R・エヴァンズの『専門知を再考する』（2020、名古屋大学出版会）を要約した上で、そこで論じられたさまざまな専門知概念と発揮の仕方について、これまでの経験や今後の仕事に応用し解決方法を提案するという卒論を執筆した。

使用した文献がかなり抽象的な内容だったため、読解と要約ともに苦労したと思う。卒論でも、もう少し正確な整理と説明が必要だと思われる箇所はあった。とはいえ、繰り返し質問し書き直したことで、苦手だった、他者を想像し詳述する力を着実に身に付けたと思う。主に野球の例で説明したことは、まさに卒論の内容という貢献型専門知を、対話的に伝えた実践である。専門知の応用事例をプロ野球の監督にしぼると、説明対象のレベルがそろって読みやすさと面白味が増したかもしれない。また考えてみてほしい。

育児休業のありかた～国家公務員を例に～

西岡 果歩

果歩さんは、自分が好きなこととして、赤ちゃんを見ると癒される、ショッピングでストレスが解消されるということを挙げていた。両方とも果歩さんの生活に密接にかかわっているが、これをどのように学術的な問いを見つけていくのかは難しそうだという印象をもった。そこで3年生の春学期は関連エピソードを詳しく書き、自分にとっての重要度を確認することに費やした。その結果、果歩さんは赤ちゃんの魅力を選び、私からは心理学や「赤ちゃん学」につながるのではと紹介した。ただ、果歩さんが次に書き加えてきた文章では、自分の理想の家庭像に子どもは欠かせない、子どもは家庭に幸福をもたらすはずだという仮説が書かれており、保育士の友人に対話する予定とのことだった。

その対話後、果歩さんは、友人が最終的に子どもは家庭に幸福をもたらすと話したという点を強調していたが、それに至る友人の語りの端々からは、むしろ幸福な存在となりえていな子どもの存在や、そうした子どもに向き合うことの苦しさ、こぼれだしていた。果歩さんに、対話すべての文字化、重要なポイントのマーク、トピックごとの整理といった分析作業をしてもらった結果、家庭に幸福をもたらす存在に子どもがなるためにはどうすればよいのかという問いに絞られていった。

最終的に卒論では、国家公務員の育児休業制度（育休）を中心とすることとし、先の対話の結果と、『「家族の幸せ」の経済学』（山口慎太郎，2019，光文社）の育休に関する部分の要約、国家公務員の育休制度の詳細と利用実態をまとめた。国家公務員の制度が民間企業に先行するモデルとなりうるのではという目論見でのテーマ設定だった。調べてみると確かに民間企業に比べ制度も充実しており、近年の男性の取得率は特に比較的高く、また育休後の復帰率も非常に高いということである。

国家公務員、中でも霞が関の本省で働く公務員は激務という印象があり、育休の取得率の高さは意外でもある。女性の取得率が特に高いのは、常勤とはいえ「休めるポスト」についているからではないか、男性で取得しているのはどこのようなポストの人なのか。また取得率はどのように調べられたものなのか。さらに調べてみると、よりリアルな利用実態が見え、根本的な提案につながるように思う。調査結果の数値は、なぜその数値なのかという理由は教えてくれない。一見では気づきにくい世界の存在を前提とすると、果歩さんが就く教職でも、学習者・学習内容に対する見方が豊かになると思う。

どのようにすればストレスを軽減できるのか

—マインドフルネス瞑想とセルフ・コンパッションを使ったアプローチ—

俣木 友朗

友朗さんの卒論のテーマに至るまでを振り返ると、初めはフィンランドの教育制度に興味があるということで、なぜなら日本人は幸福を感じていない、ストレスを抱えているからだと述べていた。この時点では、問題をもっているのは「日本人」とされていた。そこで私から自分を主語に書き直してみるようながしたところ、自分自身が周りに対し意見を表明できない、時間管理、完璧主義などによりストレスを感じているということを文章にした。進級論文では、友人と対話し、自分とのストレスの感じ方を比べ、自己を否定する傾向が強いという結論をえた。そこから友朗さんはストレス解決のための心理学について調べ、ポジティブ思考の身に付け方をいったんは取り上げようとしたものの、それではもしネガティブ思考に陥った場合、またそうした思考に陥りやすい自分を否定してしまうのではないかと考えた。そして「マインドフルネス」とその発展形としての「セルフ・コンパッション」に出会い、それぞれに関する代表的な学術書を読み、歴史・理論・方法をまとめていった。

私は心理学について知識がなく、自分の問題解決に役立ちそうだとということで、マインドフルネス療法を見つけてきたのは友朗さんだった。ただ偶然にもちょうどそのころ緊急事態宣言が始まり、私の子どもが、Ana María Gómez の「しんじゅがいとチョウチョのおはなし—コロナウイルスとわたし」という小冊子を幼稚園からもらってきていた。今考えていることをことばや絵にするようながしたり、一人ではないことを強調したりと、マインドフルネスの理論が背景にあることがうかがわれた。

コロナ禍に限らず、今を生きる人々の多くは、大量の他者の意見・情報に触れ続けている。他者を意識し他者と比べ、自分で自分を否定しやすいという問題は、友朗さんだけの悩みではない。友朗さんが自分自身のストレス軽減のために多くの心理療法の中から選び、理論の意義、具体的な方法をまとめた卒論は、ほかの人が読んだときも具体的なストレス軽減の指針となりえるだろう。今この瞬間の自分を見つめ、自分で自分を慈しんだり、同じように他者を慈しむという思想は、ともすれば「それでは競争に勝てない、甘い」という反発を生むかもしれない。そう言う他者がいたとして、排除するのでも哀れに思うのでもなく慈しむ。とても難しいが、友朗さんならきっとできそうだ。

コミュニティの“つながり” — 「東春閣」

李 春海

春海さんとは1年生の日本語クラスの時から面識があり、出身の深圳で飲食関係の起業をする夢をもっていることを知っていたので、私のゼミを希望したのは意外な気がした。3年生の初めには、起業の準備としてまずは日本語を使った仕事という話を聞いた記憶がある。ただ、それが自分の一番の関心事かと確認するとそういうわけではなく、起業のために深圳で「食べ歩き」に関する飲食事業展開の可能性を調べてみたいということだった。私は春海さんに、なぜ深圳なのか、その場所の魅力にさかのぼって考えてみてほしいとリクエストしたのだが、春海さんは飲食事業が本当にできるかを確認めたく、すぐに深圳という場所の地理的特徴や年齢別人口構成比など、事業内容やターゲットを特定するための調査にかかった。事業開始には確かに調査が必要なのだが、私自身は、春海さんが深圳という場所づくりにどのように参加していくのか、そこで春海さんはどのように生きていきたいのかといった、もう少し大きなゴールを一度考えてみてほしかった。

そのことを何度か伝えると、春海さんは深圳の中でも自分の出身地である石岩地域に焦点を狭め、そこで実際に飲食店を営むLさんと対話することにした。春海さんは石岩にある美食街がなぜ他地域の美食街のように観光地にならないのかという疑問をもっていたが、Lさんによれば無理に観光地化する必要はなく、現在の地元住民のための美食街としてさらに発展させていけばよいとの答え。この新しい視点を得て、春海さんは、広井良典『コミュニティを問いなおす』を読み、4年生の夏には深圳の石岩でのインタビューや現地調査を予定していた。ところが新型コロナウイルス感染症の流行で帰国自体が難しくなった。4年生の夏休み前に急遽相談して、春海さんが長らくアルバイトを続けてきた中華料理店を取り上げることに方針転換し、卒論では、実際の観察結果も踏まえ、コミュニティの中で生きるレストランの在り方について調査・検討した。

コミュニティとコロナ禍という二つに焦点が当てられたために、卒論全体の主張が少し見えにくくなった点は残念だ。しかし、地元コミュニティとともにある飲食店という視点を対話と文献から得て、店での現地調査、ウェブサイトなどでのデータ調べと、順々にまた着々と卒論を進めたことを評価したい。議論や執筆過程で脇道にそれてしまうような様子を私は感じていたのだが、終わってみれば、春海さんの思考の道筋に沿って歩んできたことが読み取れた。いつか石岩で会える日を待ちたい。